

フライハイト交響楽団

フライハイト交響楽団 第55回 定期演奏会

第1ヴァイオリン

赤松 栄
太田 萌
塩川 芳彦
品田 しのこ
鈴木 ゆき子
関矢 雄太
田中 美加子
谷後 真奈美
田村 浩子
友野 美怜
西川 くるみ
西林 聡美
濱部 彩
原口 広輝
藤代 美有紀
森富 愛子
◎山崎 瑞恵
吉田 有一郎

第2ヴァイオリン

伊藤 真紀子
伊藤 緑
大岩 淳子
大越 智
小野 春枝
加藤 恵美
金子 光宏
黒住 美音
高谷 康子
柘植 絢香
辻 みゆき
◎戸ヶ崎 真央
中島 章乃
野本 香菜
濱中 紗句
吉村 昭彦
米村 由紀

ヴィオラ

○相田 比乃
有賀 正剛
市川 麻実
伊藤 沙世
小塩 みどり
寛 明子
金子 いづみ
河村 学
小林 聡子
柴田 淳志
関田 秀樹
床次 由圭
森本 涼代

チェロ

青木 有希
赤松 尚
井口 なつみ
市川 潤一
清野 晴子
高須 陽子
鶴丸 靖子
濱欠 宏哉
別府 紀代子
山本 裕子
◎横山 真男
米村 昌幸

コントラバス

市原 奏
伊藤 万希子
◎内山 祥広
甲斐田 美奈子
熊谷 琢次
田島 卓
田畑 俊明
山田 啓太
和田 玲子

フルート

内澤 妃呂美
岡崎 大
高角 伸江
吉田 亜希子

オーボエ

安藤 俊子
田地 晶
前田 明子
森崎 恭子

クラリネット

白川 麻美
高野 大周
濱中 尋吉
本田 雄健

ファゴット

大久保 卓哉
辻 昭雄
富田 雅樹
横地 知子

ホルン

飯塚 みき
坂口 裕志
白川 正人
中鹿 秀明
野尻 百合子
信岡 良典
本田 景子

トランペット

青木 茂
荻野 雄太
☆瀧野 啓太
山崎 浩司
米田 倫之

トロンボーン

☆生稲 雅威
☆犬竹 守
金子 智博
高橋 重典

チューバ

堀野 史郎

打楽器

大泉 佳那子
小野 美智子
関 三翠里
山田 小和加
山田 弘

ハープ

大泉 佳那子
☆東森 真紀子

◎…コンサートマスター
○…弦楽器トップ
☆…賛助



Concert Information 定期演奏会のご案内

第56回定期演奏会

【日時】2026年3月1日(日) 13:30開演予定
【会場】すみだトリフォニーホール 大ホール
【指揮】森口 真司
【曲目】芥川也寸志：交響管弦楽のための音楽
プロコフィエフ：交響組曲「キージェ中尉」
ハチャトゥリアン：バレエ音楽「ガイース」より抜粋

第57回定期演奏会 (設立30周年記念)

【日時】2026年9月22日(火・祝) 13:30開演予定
【会場】横浜みなとみらいホール 大ホール
【指揮】井崎 正浩
【独唱】ソプラノ 飯田みち代、メゾ・ソプラノ 山下牧子
【合唱】コール・ミレニアムおよび一般公募団員
【曲目】マーラー：交響曲第2番「復活」

第57回定期演奏会／マーラー：交響曲第2番の合唱を募集しております。練習日程等詳細は、混声合唱団コール・ミレニアムの挟み込みチラシをご覧ください。

団長 渡辺 正浩
内務 青木 茂
内澤 妃呂美
高須 陽子
渡辺 道子
外務 塩山 康太
横地 知子
米村 由紀
選曲・指揮者交渉 米村 昌幸
会計 塩川 芳彦
広報 井口 なつみ
白川 正人
谷後 真奈美
前田 明子

ライブラリアン 金子 光宏
田地 晶
コンサートマスター 佐々木 陽介
戸ヶ崎 真央
山崎 瑞恵
米村 由紀
トレーナー交渉 【弦】井口 なつみ
【管】本田 景子
【打】大泉 佳那子
塩山 康太
お世話になった先生方 【弦】竹中 勇人
(敬称略) 戸澤 哲夫
花崎 薫
渡邊 玲雄
【管】阪本 正彦
【打】山田 徹



2025. 9/23 tue 火祝
開場 12時45分
開演 13時30分



Program

ドビュッシー： 「海」 管弦楽のための3つの交響的描画

マーラー： 交響曲第1番「巨人」

指揮者
山上紘生 Koki Yamagami, conductor

宮崎県生まれ。ピアノを小倉貴久子氏、ヴァイオリンを向井理子氏、瀬戸瑠子氏に師事。埼玉県立浦和高等学校を経て東京藝術大学音楽学部指揮科に進学し、高関健氏、山下一史氏に師事。2017年6月バーヴォ・ヤルヴィ氏の指揮公開マスタークラスを受講。また、尾高忠明氏、角田鋼亮氏、広上淳一氏、下野竜也氏、ジョルト・ナジ氏、ラースロー・ティハニ氏のレッスンを受講する。在学中に「宮田亮平奨学金」、卒業時にアカンサス音楽賞、同声会賞、若杉弘メモリアル基金賞を受賞。同大学院音楽研究科指揮専攻修士課程修了。公益財団法人日本製鉄文化財団2021年度若手指揮者育成支援制度に合格し、紀尾井ホール室内管弦楽団などで研鑽を積む。2021年10月より2年間東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の指揮研究員を務め、その間第361回定期演奏会に代役として急遽出演し、吉松隆「交響曲第3番」を指揮した。



©井村重人

Program Note 楽曲解説

ドビュッシー：「海」 管弦楽のための3つの交響的描画

今年には1905年の「海」初演からちょうど120年。同年に出版されたデュラン社の総譜の表紙にはドビュッシー自身が選んだ葛飾北斎の『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』が大胆にあしらわれている。この作品は波の向こうに見える富士山の構図が印象的だが、表紙に採用されたのは浮世絵の左側の大波の部分だけ。これが意図的であったのか、あるいは印刷のレイアウト上仕方のないことであったのかはわからない。しかし、ドビュッシーが「海」を作曲していた1903年から1905年は、彼自身の人生も大波の中にあったことは確かである。

1903年、ドビュッシーは弟子の母であった声楽家と道ならぬ恋に落ち、書きかけの「海」のスコアを携えて駆け落ちし、逃避行先の海沿いの町で作曲を進めることとなった。ショックを受けた妻の自殺未遂によりドビュッシーは世間から大バッシングを受け、追い討ちをかけるように、1905年10月の「海」の初演は失敗に終わり、評論家からは「全く海を感じられない」と酷評にさらされることに。「海」の再評価は1908年の作曲家自身の指揮による再演を待たねばならなかったが、その後ドビュッシーの代表作として、また現代音楽の嚆矢となる重要な作品のひとつとして、世界中で演奏されることとなるのである。

「海」は3楽章の構成を持つ大曲だが、ドビュッシーは交響曲とは書かず「3つの描画(スケッチ)」と表現した。同時代のモネやルノワールといった印象派の画家たちは、戸外制作によって変化する日の光を色彩豊かに描写した。ドビュッシーもそうした新たな芸術の潮流の中にあり、ドイツ音楽的枠組みから脱却した筆致で海をスケッチしたのである。ぜひ海を感じながらお聴きいただきたい。

(前田明子)

I「海上の夜明けから真昼まで」

夜明けの海面に漂う霧のような冒頭に始まり、闇から徐々に朝日に照らされた海面が表われ、絶え間なく変化する海のテクスチャーを長い一息の音楽で描き出す。一瞬の風のあと、南中に向かう太陽が海を光り輝かせるようにブラスのコラルールが鳴り響き、輝かしい波濤で終結する。

II「波の戯れ」

スケルツォ楽章。次々に現れては消えるフレーズの断片が、気まぐれでとらえどころのない波の様子を表す。

III「風と海の対話」

嵐の到来。三連符の半音階主題が風と海のせめぎ合いを象徴する。第1楽章の動機が回歸し、最後は嵐が吹き荒れるような迫力のクライマックスを迎え、強烈な一撃で全曲を締めくぐる。



フライハイト交響楽団

当団は、1996年4月、東京都内および近郊の大学オーケストラに所属している学生、及び卒業した社会人が中心となり音楽文化の交流を深める目的で結成されました。毎年2回の定期演奏会を中心に、古典ロマン派からアマチュアでは取り上げる機会の少ない難易度の高いプログラムまで、様々な時代や編成の楽曲に意欲的に挑戦しています。

当初はJMJ(青少年日本音楽連合)で活動していたメンバーが中心でしたが、年を重ねて幅広い年齢層、様々なバックボーンや経験を持つメンバーが増えた現在も、結成以来変わらぬ音楽への情熱と団員間の厚い信頼をベースに、常に聴衆を魅了する質の高い演奏を実現すべく、アンサンブル力や表現力の向上に取り組んでいます。

マーラー：交響曲第1番「巨人」

グスタフ・マーラー(Gustav Mahler, 1860–1911)とフライハイト交響楽団は、創立の経緯やその後の歩みにおいて、とりわけ深い関わりを持っている。創立のきっかけとしても、JMJ(青少年日本音楽連合)で活動していた多くのメンバーが出演した1993年秋の交響曲第2番『復活』(指揮:金 洪才)公演のころより、具体的な創団に向けた動きが始まったと記憶している。もちろん、当団はマーラー作品の演奏を専門とするオーケストラではないが、第1回演奏会(交響曲第9番)以来、節目ごとにマーラーの作品を取り上げてきた。その意味で、マーラーは多くの団員にとって特別な思い出のある作曲家である。

現在、第50回記念定期演奏会での交響曲第9番の再演を皮切りに、当団もいよいよ新たなステージへと歩みを進めている。今回取り上げる交響曲第1番『巨人』も、2002年2月2日(土)サントリーホールでの第12回定期演奏会以来、約四半世紀ぶりの再演となる。一世代を超えたこの間に多くの新しい仲間を迎え、今回の公演では新進気鋭の若き指揮者・山上紘生氏を迎えることとなった。若きマーラーが作曲したこの交響曲第1番を、フライハイト交響楽団らしい、さらに深みのある演奏としてお届けできればと願っている。

マーラー演奏の系譜(敬称略)

- 交響曲第9番 (第1回定期演奏会 指揮:大島 義彰)
- 交響曲第1番『巨人』 (第12回定期演奏会 指揮:森口 真司)
- 交響曲第5番 (第15回定期演奏会 指揮:山田 和樹)
- 交響曲第2番『復活』 (第20回定期演奏会 指揮:長田 雅人)
- 交響曲第7番 (第24回定期演奏会 指揮:森口 真司)
- 交響曲第6番 (第34回定期演奏会 指揮:森口 真司)
- 交響曲第3番 (第36回定期演奏会 指揮:井崎 正浩)
- 交響曲第9番*再演 (第50回記念定期演奏会 指揮:森口 真司)
- 交響曲第1番『巨人』*再演 (第55回定期演奏会 指揮:山上 紘生)
- 交響曲第2番『復活』*再演 (第57回定期演奏会 設立30周年記念 2026年9月22日(火・祝) 指揮:井崎 正浩)



フライハイト交響楽団のホームページ

今後の演奏会情報、またこれまでの活動実績等がご覧頂けます。



<http://freiheit-sinfonie-orchester.s3-website-ap-northeast-1.amazonaws.com>

交響曲第1番の作曲は1884年に着手され、多くの改訂を経て1888年に完成した。1889年の初演では「二部からなる交響詩」として演奏され、1896年の改訂以降「交響曲第1番」となった。「巨人」という表題は、ドイツ・ロマン派の作家ジャン・パウルが、波瀾万丈の運命に翻弄されながらも王位に就く青年を描いた長編小説『巨人』(Der Riese または Titan)に由来する。その意味で、この「巨人」は単なる力強さを表すのではなく、主人公の内的葛藤や成長を象徴していると解釈できる。また本作は、同時期に作曲された『さすらう若人の歌』(1885年)との関連が深く、そこから多くの旋律が引用されている。マーラーの交響曲は歌曲とのつながりが特徴でもあり、続く交響曲第2番『復活』から交響曲第4番までの3曲の交響曲は「角笛交響曲」とも呼ばれ、『子どもの魔法の角笛』の詩を歌詞とした歌曲が直接的・間接的に用いられている。この交響曲第1番は大編成の交響曲でありながら、それぞれの楽器に歌曲的な旋律を歌わせることに成功しており、歌の豊かな情念に加えて、力強さ、華やかさを兼ね備えた若々しい作品である。

(辻 昭雄)

第1楽章
「ゆるやかに、重々しく」
＝長調 4/4拍子 ソナタ形式

第2楽章
「力強く運動して」
＝長調 3/4拍子 三部形式

第3楽章
「緩慢なことなく、荘重に威厳をもって」
＝短調 4/4拍子 三部形式

第4楽章
「嵐のように運動して」
＝短調 2/2拍子 ソナタ形式

参考文献:『最新名曲解説全集』第2巻 交響曲II(1979年、音楽之友社)